BOOKSHOP LOVER
1

BIBLIOPHILIC & book union 新宿

はじめに

　はじめまして。まずは自己紹介から。wakkyhrと申します。主にネット上で活動しております。好きなものは個性的な本屋と刺激的な本。美味しいものに素敵なもの。それと、面白い人。普段は会社員をしております。本屋が好きなのですが、今は全く異業種で総務やってます。好きだと気付いたのが就職のあとなもので。世の中うまくいかないものです。

　そんな訳で、アフター5に余りまくった迸るこの情熱で本屋に捧げるオマージュが本書でございます。タイトルはそのまま「BOOKSHOP LOVER」（本屋好き）。「１」とありますように撮影許可を貰った本屋さんに関しては、どんどん作っていきますのでよろしくなのでございます。

　さてさて、本屋好きというとどんな人を思い浮かべますか？

　僕が思う本屋好きとは、①まず、第一に本好きであること。②知らないことがいっぱい＝楽しみがいっぱい。③猫は好きだけど好奇心には負ける…など色々ありますが、やっぱりこれは外せないのが「人間好きであること」。

　本は当たり前ですが一冊一冊が違います。それぞれに著者、編集者、デザイナー、印刷業者と多くの人たちの汗と情熱とその他もろもろが詰まっております。それらの情念が凝り固まったものが本なのです。そんな本でありますが、何かに似ていると常々思っていたのです。それがつい最近、思いつきました。そう「人間」に似ているのです。

　これは僕の人間観ですが、人って周囲の環境によって作られる部分が多いと思うのです。親はもちろん学校の先生、同級生、上司、同僚。読んできた本や映画、聴いた音楽、住んだ場所。それぞれの環境の影響を大きく受けて人間は成り立っていると思うのです。もちろん環境によって成り立っているということは、違う環境に行ったら違う顔を見せるなんてことは往々にして起きるわけです。

　本も同じなのではないかと思うのです。著者はもちろん関わる人や会社によって全く違うものができてしまう。同じ本でも違う出版社が作れば違うものになってしまう。はたまた置かれた店や本棚の位置によっても。そんなたくさんの本≒人間、しかも、それがたくさんある本屋さんを好きな人が人間好きでないわけがない！とまあ、暴論と言いますか当たり前なことと言いますか。長々と書いてしまいました。

　「BOOKSHOP LOVER 1 BIBLOPHILIC & book union 新宿」スタートです。

目次

１．はじめに
２．音楽は支えである。
３．読書における音楽の効用について
４．ふんぞり返る猫と明治の文豪
５．本屋探訪記　**vol.3**（**2011/12/10(**土**)**訪問時）

BEANS
BIBLIOPHILIC
book
union
レコード買取
10%UP
キャンペーン

音楽は支えである。

　朝起きる。朝食を食べて、スーツを着込んだら外に出よう。イヤホンから聴こえてくるのはビートルズ。ジョン・レノンの優しい声が眠たい体を起こしてくれる。仕事が終わる。おもむろにiPhoneを取り出しイヤホンを付けて小林大吾の詩を聴く。別世界。ウィットに富んだ下らないイメージが頭の中を駆け巡る。
　音楽は支えだ。学生時代に言って、からかわれた言葉だけれど、今なら何の恥ずかしげもなくそう思える。意味の分からない満員電車や当然のように矛盾した上司の指示。8時間もの時間を不毛な作業に追われて過ごす。別に苦しい訳じゃないけれどもこれといって楽しい訳でもない。予定通りに事もなく進めるのが何よりの命題だ。
　そんな風に日々を過ごしていると居てもたってもいられなくなるときがあるだろう？
　別に特別なことじゃない。誰だってそういう経験はある。こんなはずじゃなかった。もっと楽しい日々を送るはずだったのにこの現状は一体何だ？　原因が自分にあるってことを自覚しながらもそう言わずにはいられない感情の妙。
　何も考えずにやり過ごす。そうすればとりあえずは安心だ。別に何も解決していないけど時間だけは経ってくれる。時間が経てば気分は持ち直す。そうしたらまた満員電車に乗って不毛な作業をやりに行く。あしたもあさってもしあさっても。
　itunesを開く。お気に入りの曲をかける。気分はそれまでのままではいられない。楽しくなる。叫びたくなる。泣きたくなる。腐ったヘドロみたいな見えない何かが揺さぶられて消えていく。ヘドロを生みだす根本は何も変わらないけれど、少なくとも今そこにあるそいつは消える。それでいい。世間は事もなし。全ては平和裏に進んでいく。

読書における音楽の効用について

　本を読むときは音楽をかける。集中できないなんて言う向きもあるけれどそうは思わない。むしろ、気持ちをリラックスさせてくれるから本の内容を頭の中に入れるのにはちょうどいいと思う。
　とは言ってもなんでもかければいいってわけじゃない。ダンスミュージックや激しいロックが鳴り響く状況で集中して本を読むなんてできるわけがない。もっと静かな曲が良い。できればジャズならうれしい。日本語歌詞が入った曲は聴けない。本の言葉と衝突してしまうからだ。

吾輩は猫である。

あい・うぉんちゅう～♪

名前はまだない。

あい・にいじゅう～♪

…落ち着いて読めるわけがない！

　ところで、読書と合う音楽とはどんなものだろう。まず、最低限、読書の邪魔にならないものである。そして、できれば読書の効果を高めるもの。
　では、読書の邪魔にならない条件とは何だろう。思いつく限り挙げてみると、音量が大きすぎないこと。できれば言葉がないこと。あったとしても日本語でないこと。日本語だとしてもメッセージ性が少ないこと。こんなところだろうか。
　本を読むのにもいろいろな目的があるだろうが、基本的には情報収集だろう。実用書はもちろんそうだし小説もそうだ。小説に描かれているのは新しい世界観という情報なのだ。思想書を読む場合はどうだろう。これは世界の新しい解釈だから、言葉の意味から考えなければならなくなる。純粋理性って何だ？　リゾームって食べれるのか？　思考のフル回転が必要なのである。
　さてさて、そんな情報収集の最中、音楽は必要だろうか。「必要ない」。そんなこと言ってはいけない。何と言ったってこの文章は本と音楽についての話なのである。本を読むのに音楽が必要ないとなればこの文章の意味が全くこれっぽっちもなくなってし

まうではないか。ああ嘆かわしい。君は下らない文章を読む余裕さえなくなってしまったのか。余裕がなければ愛は生まれない。愛がなければ平和もない。君のその満員電車の様に余裕のない心が世界を苦しめているとなぜ気付かないのか！

話がそれた。

そう、読書に音楽は必要なのである。なぜか。音楽は読書の効果を高めるのである。本は落ち着かなければ読めない。心を落ち着けてまとまった情報を受け入れる準備が必要なのである。実用書はとにかく小説や思想書はそうだろう。今まで考えたこともない世界観を受け入れなければならないのだ。それにどれだけの集中力が必要だろうか。えっ？　すぐに没頭するから音楽なんてあってもなくても一緒だって？　いやいやいやいや、何を仰るウサギさん。いくらウサギさんでもその発言はいただけませんよ。没頭のために必要なものを考えて下さい。それは読書前のリラックスでしょう。考えてもごらんなさい。心を落ち着かせずにいかにして没頭などできましょうか！

以上のように読書に音楽はこれはもう絶対なのである。賢明なる読者諸君はビル・エヴァンスを聴きながら今夜も読書に興じるべきなのだ。ビル・エヴァンスでなくても構わない。この際、好きなら嵐だってジャスティンビーバーだって構わない。音楽を聴きながら読書をすれば、あら不思議。見たことのない世界にすぐ飛び立つことができるのだ。そうすれば君のそのパンパンに詰め込んだ満員電車の様に余裕のない心にも希望の光がほのかに見えること請け合いなのである。

ふんぞり返る猫と明治の文豪

　これといって用事がある訳じゃないけれど、近頃はいつもこの本屋に来てしまう。ビルの3階にあるから「ふらっと立ち寄る」という訳にも行かないのになぜか足はいつもここを目指している。はじめて来たのはこんなときだった。

　その日は、付き合って３カ月の記念日を祝って二人でイイ感じのレストランでも行ってイイ感じの料理を食べてイイ感じに酔っぱらってイイ感じな夜を過ごすつもりだったのに言うに事欠いて言った彼女の一言。「ごめん、残業入っちゃった。」

　何たる仕打ち。予約までしたというのにである。キャンセル代、高いんだぞ。金返せってんだ。馬鹿野郎。彼女の上司の不幸を未だかつてないほどの熱心さで祈りつつ、もてあました暇をどうすればいいのか途方に暮れる。一人で贅沢してもたかが知れているし何より悔しいことこの上ない。「そんなときどうすれば良いと思う？」と自問したところで不貞寝するくらいしか思いつかない有様だ。せっかくの記念日なのに何もしないで寝るのか？　それでいいのか？　この無駄に大きい脳みそは一体何のためについていると思っているのか。

　それでまあ、外にでも出てみようかと思い立った。外に出れば気が晴れる。気が晴れればこのどうしようもない身の上をどうにかしてくれるアイデアが出てくるかもしれない。それこそ湧いて出てくるように突然に。そうやって歩くこと30分。何も思い浮かばないじゃないか！　30分前のピーナッツクリームのように甘ったるい自分を蹴飛ばしたくなったのだが、あいにく30分前の自分は目の前にいないので、仕方なく近くの電信柱を蹴飛ばした。「痛ェッ！　」周囲の人が驚いて俺のことを見る。まるで変質者でも見るかのような目つきだ。「見るな見るな、見せ物じゃねえんだぞ」なんてことは言わない俺って素晴らしい。しかし最近の電信柱は固すぎる。もう少しもろくするべきだ。

こういう些細なところから経費削減は始まるのだ。待てよ。もしかして、これはナイスアイデアじゃないか？　今度、区役所の冴えないあんちくしょうに持ちかけてみよう。違う。今、俺が欲しいアイデアはそんなどうでもいい政治的な事柄じゃない。頭からところてんのように柔軟な電子柱の妄想を振り払いながらもう少し歩くことにする。何しろ今日は久しぶりの晴れなのだ。梅雨の合間に奇跡みたいに訪れた快晴の日なのだ。そんな日の夜が気持ち良くないわけがない。せめてこの気持ち良さだけでも味わってやろうと意味もなく深呼吸をして駅前まで歩くことにする。

　女の子が泣いていた。しゃがみ込んで肩を震わせて弱りきった子猫のように鳴いている。動物愛護主義者ってわけじゃないが女の子には声をかけなければバチがあたるというのは爺ちゃんの教えだ。これ以上ないほどの紳士的な雰囲気を醸し出しつつ声をかけると、振りかえりざま野太い声で「放っとけよ、馬鹿野郎！」　。

　そうだったそうだった。忘れていたがここは泣く子も黙る新宿三丁目。紳士的な雰囲気を一転、獣のような敏捷さでその場を逃げ出した。か弱い小猫を助けるつもりが、獰猛な擬態生物に食い散らかされるところだ。食い散らかされるのは構わないが、食い散らかされた後の残飯みたいになったこの俺を見て彼女が何と言うか。「もう、仕方のない人ね。」なんて笑って許してくれるのなら、俺だってこんなに息が切れるまで走ることはない。人生は短いのである。快楽は知れるだけ知っておいた方が得ってもんだ。それはまあ半分冗談だとしても、あの女の子（仮）は冷静に考えたらなかなか綺麗な顔をしていたな。今度その手の同僚を誘って探してみるか。

　気が付くとマルイの方まで来ていた。窓に映る姿はジャージにサンダルのしがないおっさんだ。構やしない。この街は俺の庭だ。何しろ家から20分ほど歩けば来れる場所なのだ。庭でどんな格好をしようが俺の勝手だ。めかしこんだ若者どもが俺の近くを歩くときは距離を置いている気がするが、それは自意識過剰ってもんだろう。まだそんな自

意識が残っていただなんて若いな、俺も。

いやいやいや。いい加減にしよう。自分に酔っている場合なんかではない。今はもてあました気持ちと時間をどうにかして解決しなければならない。財布の中身を見てみると明治の文豪が8枚。こんな寂しい懐具合では漱石先生に笑われる。でもこれは仕方ないんです、先生。今日のために買ったプレゼントの高かったこと！　あの面長店員め。馬車馬の如く働かされて弱りきったところを猫に引っかかれてしまえばいいんだ！　それはそうと給料日まで後3日とはいえ昼飯代もこの中に含まれるからな。薄氷を踏むように石橋をたたくように細心の注意を持って使わないといけない。さもなければ上司のせいとはいえこんな日に残業を食らいやがった愛しの糞ダーリンにこっぴどく叱られてしまう。

こんなときの俺のやり方はこうだ。まず、安い飯屋に入る。それこそ松屋とかすき屋とか吉野家とか（牛丼が好きって訳じゃない！）そういった500円でもお釣りがくるようなヤツだ。それから、居酒屋に入る。これは少し豪華なヤツだ。予算は先生を4，5人人質に差し出せば足りるようなヤツ。学生が入るような店じゃただでさえ不味い酒がもっと不味くなる。この時点で我が懐におわしあそばされる漱石先生は3人。残り3日の昼飯を想定しつつ買えそうなものを物色する。

ユニクロやら無印良品やらデフレの象徴とても言うべき庶民の味方を見終わった後、ぶらぶらしていると紀伊国屋が見えた。そうだ。本屋に行こう。気になっていた本があったんだ。でも、今日は金曜日。紀伊国屋が混んでいることは火を見るより明らかだ。とはいえ何事も自分の目で確かめなければ気が済まないのが俺だ。そうやって行ってみると案の定の大混雑。お手製の檸檬爆弾でも投げつけてやろうかってそりゃ丸善か。すいません。梶井先生。そんな目でこっちを見ないで下さい。

そういえば、本屋と言えば紀伊国屋のすぐ横にBIBLIOPHILIC & book unionという長ったらしい名前の店があるって聞いたことがあった。ついでだから行ってみるかと探してみたけれどない。全くない。「どこだよ、そこは、全くもう。」と苛立っていると目の端に見覚えのあるネコのマーク。インターネットで見たあのクロネコだ。本の上でふんぞり返るとは良い度胸である。表記は3階。「そりゃ見つからないはずだ。」と独りごちてエレベーターに乗った。しかし、良い度胸と言えば、この立地である。本当に紀伊国屋のすぐ隣だ。disk unionによる選書とあるから、客層が違うのだろうが。

上がってみるとdisk unionのすぐ隣に入口がある。あの本の上でふんぞり返った猫が看板の中で出迎えてくれた。「おいおい、なかなか良いじゃねえか。」とまず雰囲気に関心。サイトで知っていたが雑貨の多さに関心。そして、これまた音楽にとことんこだわった品揃えに関心。そのくせ本の本とか社会問題に通じる本も扱っていたりしてニクイねえ。ひとしきり感心して財布の中身を計算しつつ、「文学じゃないですが良いですよね、先生。」としっかり断りを入れて買ったのは「ビル・エヴァンス　ジャズ・ピアニストの肖像」。ドラッグ漬けのジャズミュージシャンの生き方から学ぶべきことなんて一つもないかもしれないけれど、そんなことは気にしない。好きなものは好きなのだ。世界中の尊敬を集めるあのメロディを作りだした人生を知りたいのはこれはもう人として当たり前なのである。

何となく物足りずに他に良い本はないかと物色しているとやけに美人な姉ちゃんが入ってきた。「あ、さっきの…。」いや、待て待て。俺にこんな美人な知り合いがいるわけがない。第一、そんなヤツがいたらとっくに誘って今頃はめくるめく煌びやかな夜をシャンパンなんかと一緒に楽しんでいる最中のはずなのだ。

「ん？　」ここで頭の中に引っかかる情報が一つ。なぜかこんな時に小猫のイメージが頭の中を駆け巡る。この娘がか弱い小猫のように可愛らしいからだと納得しようとしているのに、小憎たらしい理性がそれを引きとめる。「子猫？」ってもしかしてさっきの擬態生物ちゃんですかと気付いた時にはすでに手遅れ。「さっきは失礼なことをしちゃったからお詫びがしたいの。」とがっしりと力強く俺の手首を捕まえた腕からは想像もできない甘えた猫なで声で囁いてくる始末だ。「あの時のプロレスラー並みの野太い声はどこにやったんだ」なんて言えない弱気な俺はあえなく擬態生物ちゃんの餌食に。

「案外、悪くなかった」なんて呟いてツヤツヤした顔で時計を見ると日付が変わっている！？　こりゃやばい。俺の愛しき糞ダーリンが立腹も立腹、腹立ち紛れに俺の大事な本たちがあえなく焼却炉行きになんてことになったら目も当てられない悲劇だ。プレイ中は（仮）を外した一夜限りのスウィート擬態生物ちゃんが寝ている内にホテルを飛び出す。待っててくれよ。マイ・ダーリン。そして、出来ることなら俺の大事な本たちには手を出さずにいてくれ。

BRUTUS

YMO SUX

本屋探訪記第35弾は音楽+本のコラボショップである「BIBLIOPHILIC & bookunion 新宿」です。空犬通信さんで特集されて行きたくなったので行ってきました（2011/12/10(土)に訪問した時の記録です）。

まとめ

「BIBLIORHILIC」の旗艦店と中古レコードショップである「disk union」が展開する音楽書専門店「book union」のコラボショップです。品揃えは、音楽本を中心に映画の本や本の本、店員セレクトの読書用CD、BIBLIOPHILICの読書用品という本好きにはたまらないお店なのです。

そして、何より注意すべきポイントは古本と新刊本が混ざって置かれていること。古本はビニール掛けされているので分かりやすいが、同じ本の古本と新刊本が隣り合って置かれていたりと良い意味でにカオスな棚なのです。ここに行かないわけにはいかないでしょう！

ということで、店内の様子と感想をいつものように書いていこうと思います。

- 品揃え：音楽関連書（楽譜、写真集、音楽雑誌、音楽家の自著など）、映画本、本の本、店員セレクトの読書用CD、読書用品（ブックカバー、文房具、本棚など）。古本と新刊本が混在。本好きにはたまらないセレクト。
- 雰囲気：お洒落。木を基調とした内装です。
- 立地：新宿駅西口すぐの紀伊国屋新宿店となりのビル3階。あえて紀伊国屋の隣というセンスがたまらん！disk unionの隣に作っただけという可能性も高いですがw

目的地は…

一ヶ月ぶりの新宿は呆れるほど人が多くて、酔いそうだ。だが、せっかくここまで来たのだからと気を奮い立たせてまずは紀伊国屋新宿店に向かい、迷い込みたい欲望と戦いながら紀伊国屋の目の前を通り過ぎてすぐ近くにあるらしい目的地に向かう。

iPhoneのマップを覗き込みながら「あれ～、ここら辺のはずなのにな…」と5分ほど迷っていると、すぐ隣のビルに「disk union」の看板があることに気づく。ということは…案の定、隣に目的地の看板が見えた。

今日の本屋探訪記は第35弾「BIBLIOPHILIC & bookunion 新宿」だ。

内装について

エレベーターで３階に上ると目の前にdisk union。その左に「BIBLIOPHILIC & bookunion 新宿」はある。看板の猫が可愛らしい。中に入ってみると木を基調とした落ち着いた雰囲気の店内となる。ほぼ正方形の形をした店内の広さは10畳くらい。BGMはジャズだ。

レイアウト

まず、店内のレイアウトをざっと概観してみる。

入ってすぐ目の前に平積み台がありフェアの展開がされている。左手はカウンター。カウンターの奥の壁（左辺）では雑貨が売られ、正面の辺と右辺の壁は全て備え付けの本棚だ。

その他、入ってすぐ右手に2m級のカラーボックスタイプの本棚が壁に沿って2本あり、平積み台の奥には腰くらいの高さの棚が平行に1本。その奥に胸くらいの高さの棚が垂直に2本。カウンター前にも、カウンターに対して垂直に頭を越すくらいの高さの棚が2本ある。

平積み台

　さて、店内を回ってみよう。まずは、目の前の平積み台からだ。一番目立つ場所にあるこの展示場所では「中古パンフレットフェア」が行われており、僕は知らないようなタイトルがたくさん。マニアにはたまらないのだろうか。そういった佇まいのパンフレットが並べられている。そのほか、雑誌「レコードコレクターズ」やザ・ビートルズの冊子が年代ごとで10冊くらいずつセットで売られていたり裏に回ると雑誌「ジャズ・パースペクティブ」や雑誌「ブルータス」と雑誌「ペン」の音楽特集の号があったり、さらに「マイケルジャクソン特集」が組まれていたりする。「この店は音楽書の店ですよ！」と意思表示しているかのような台である。

平積み台奥の棚

　平積み台を後にすると、奥には腰くらいの三段の本棚で、もちろん一番見やすい棚の上は平積みとなっている。ここの手前側は「本の本」のコーナーだ。本屋の本、出版の本、紙の本、装丁の本、絵本の本、本棚の本、本の歴史、古書の本などなんでも揃っている。ここまで本の本が充実している本屋は少ないだろう。具体的には「シェイクスピアカンパニー書店の優しき日々」や「装丁道場」、「猫の本棚」、「堀内誠一　旅と絵本とデザイン」、「本棚の歴史」などだ。たまらんにも程がある！しかし、積読解消期間中につきどうにか購入をしないで済んだ。偉いぞ！　自分！
　「本の本」コーナーの裏は「ミュージックフォーリーディング」のコーナーだ。具体的に品揃えを説明する前にPOPから引用したい。どんな本棚か分かりやすいはずだ。「読書のための音楽。…ディスクユニオン各ジャンル担当が独断と偏見で選び抜いた読書BGMコーナーです。」まさにコラボ店ならではの企画である。

　品揃えはというと、CDが棚の上に平で置かれており、棚の中には音楽雑誌がある。「レコードコレクターズ」や「ストレンジデイズバック」などだ。しかも横にはこう書いてある「バックナンバーお探しの場合はスタッフまで」うーん。心憎いサービス。

「本の本」「ミュージックフォーリーディング」棚奥の3つの棚

この奥には入り口に対して垂直に並べられた三段の棚が二列ある。両方とも読書用品だ。「BIBLIOPHILIC」のコーナーとも言える。オリジナルブックスタンドやブックダーツ、ブックマーク、ツバメノート、つながるノート、赤青ペンケース、ペンは剣よりも強し鉛筆、quaint designの書類入れなどが置かれていた。

カウンター前の二つの棚

振り返るとカウンター前の二つの棚がある。手前側から説明すると、二段構成で棚の上にはオリジナルブックカバーと紙和のブックカバーが置かれ、棚の中には音楽の大判本が並べられている。写真集がメインでレットツェッペリンの写真集やビートルズの写真集、「カルトロックポスター集」などである。この棚の裏には同じく棚の上にブックカバーあるが、中は資材置き場となっている。なぜこんな見えやすい場所にするのかが疑問だった。せめて引き出しにするなり何なり出来ただろうに。これは唯一残念な点だった。

振り返ると奥の棚（カウンターから見て左の棚）で、ここは段が変則的になっており面白い棚になっている。オリジナルエコバッグや本型小物入れ、肩掛けブックカバー、紙和のバッグなどが置かれていた。店舗の左辺に向かうほど、より読書で使うというよりも読書関連用品の色合いが強くなるようだ。

この変則棚の裏も同じように変則的な構成となっていて、品揃えはというとラミネートフィルムや補修テープ、グラシン紙、リーディングデスク、ルーペ、ブックストッパー、リーディンググラスなどだ。

壁の棚

ここからは壁に面した棚について説明する。先ほどの棚を見ながら、振り返ると店舗の左辺に突き当たる。ここも読書用品でアクリルボックス本棚、ペイパーコレクター、英雑誌がある。

そして、入り口から一番遠い店舗正面の辺と右辺はほぼ一面が本棚で、膝くらいの高さに平積み用に台がせり出した形となっている。棚の形は先ほどの変則棚と同じように段が変則的な高さになっている。見ていて面白い約五段棚だ（「約」というのはランダムであるため）。

オーディオ棚側からジャンルを述べていくとクラシック一列、ジャズ・フュージョン五列、ソウル・ブルース一列、クラブミュージック一列、ワールドミュージック二列、映画二列となっている。店舗の角にはオーディオ専門棚が一つ置いてある。10畳とはいえ、ここしかオーディオ本が無いということを考えるとやはりオーディオはかなりニッチな趣味なのだろうか。正直興味は無いが、音楽書の店での扱いがこうなのは少しさびしい気がする。

ちなみに内容は「ジャズオーディオ放蕩生活」、「オーディオの作法」などだ。品揃えは挙げだすときりが無いので平積みのみ挙げていくと、「猫丸しりいず」、「拍手のルール」、「ボクの音楽武者修行」、「日本フリージャズ史」、「あるてす」、「ラップのことば」、「荒木飛呂彦の奇妙なホラー映画論」など。

ここまでが店舗正面の辺で、ここから折れ曲がり右辺になるのだが、その前に角の説明をしたい。というのもこの角が雰囲気作りに一役買っているからだ。書斎の机をテーマとしただろう作りの台と棚になっていて、そこに文房具や本(深夜特急やボリスヴィアン全集など)、空き瓶、コーヒー豆などが置かれているのだ。ダンディーな世界観。開高健や植草甚一の世界に近いのだろうか。小さいスペースだがこういう細かい演出が全体を際立たせるのだと思う。

ここからが店舗右辺の棚である。腰くらいの高さから上に四段の棚があり（変則ではない）、腰の高さでせり出してそこに平で本が置かれている。そして、せりだした場所も棚になっていてそこは一段という構成だ。

まず、ジャンル別に紹介していくと、手前から入り口側に向かって、ノイズ・アヴァントが二列（全体の三分の一）、ロック・ポップスが最上段三分の一、ジェイポップスが残り三分の一、プログレが二段目の残り半分、ハード・ヘビーが三段目残り半分、パンクが四段目残り半分、足元に楽譜が一列全部となっている。

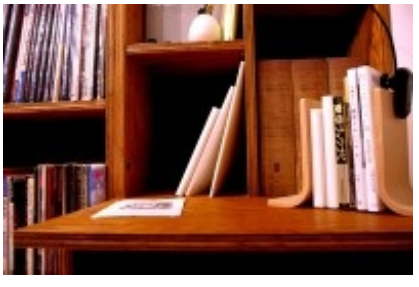
品揃えについてはここでも平台を挙げていくと、岡本太郎「今日の芸術」、「レスポール読本」、「ノルウェイの森」、「音盤時代」、「1984年」、「ロックとメディア社会」、「ガセネタの荒野」、「音楽とことば」、「十年ゴム消し」などだ。

入り口右横の小さい棚

　さて、壁棚を見終わってこれで終わりかと思ったらそうはいかない。入り口正面の平積みフェア台に隠れて、2m級カラーボックス型の棚が入り口すぐ右横に2本あるのだ。まず、右辺壁棚の隣、一番入り口に近い角に「文庫フェア　この冬 日常に本を一冊、カバーと一緒に連れだそう。」の棚が一つ。「グスタフマーラー」や「考えるヒット3」、「僕が愛するロック名盤240」、「ピーターバラカン」、「ビートルズの謎」、「ブルーノート再入門」などなど読みやすいサイズの文庫や新書の音楽本が並べられている。
　ここでディスクユニオンにつながるチェーンで区切られた通路を挟んで（なぜつなげたのかは不明ｗ）、入り口すぐ右横に本棚が一本ある。内容は「スタジオボイス」や「ミュージックライフ」、「ザ・ディグ」などの音楽雑誌だ（バックナンバー含む）。意外とこの入り口すぐ横の棚が一番マニアックかもしれない。

感想

　「全体として音楽と本がうまいこと出会った店」という感想を持った。そりゃ、そういうテーマの店だから当たり前なのだけれど（笑）ノルウェイの森とか1984年とかが音楽本に紛れてさりげなく置かれていたり、クラシックものの少女マンガ（「のだめカンタービレ」ではないです）が置かれていたりする。音楽好きかつ本好きでないと出来ない棚作りであると思う。そして、何よりジャンルレスであることを特筆したい。
　マンガや文庫、新書、単行本など本の形式を飛び越えるのはもとより新刊と古本を並べていること。雑貨との融合はされていなかったのが残念でしたが、それが為されていればスタンダードブックストアもびっくりの融合っぷりなのだ。
　個人的には本の本の品揃えが良かったことが嬉しかった。ここまでの品揃えでしかも古本も並列で扱っているので、これは重宝しそう。まあ大阪在住なのでちょくちょくは行けないが…。千円お買い上げでオリジナルしおりを頂けるということで、読書用CDを購入してその場を後にした。ホクホク気分なのだ。
　本好き音楽好きには是非とも行ってみて欲しいお店！新宿にお立ち寄りの際には是非行ってみてください！！



奥付

BOOKSHOP
LOVER
～本屋好き～

著者：本屋好き
http://p.booklog.jp/users/wakkyhr/profile

本棚あそび
ブログ：http://bookshop-lover.com/bookshelfplaying/
Facebookページ：http://www.facebook.com/hondanaasobi

BOOKSHOP LOVER　～本屋好き～
ブログ：http://bookshop-lover.com/
Facebookページ
http://www.facebook.com/pages/%E6%9C%AC%E5%B1%8B%E5%A5%BD%E3%81%8D/191780904292947

感想はこちらのコメントへ：http://p.booklog.jp/book/65514
ブクログ本棚へ入れる：http://booklog.jp/item/3/65514